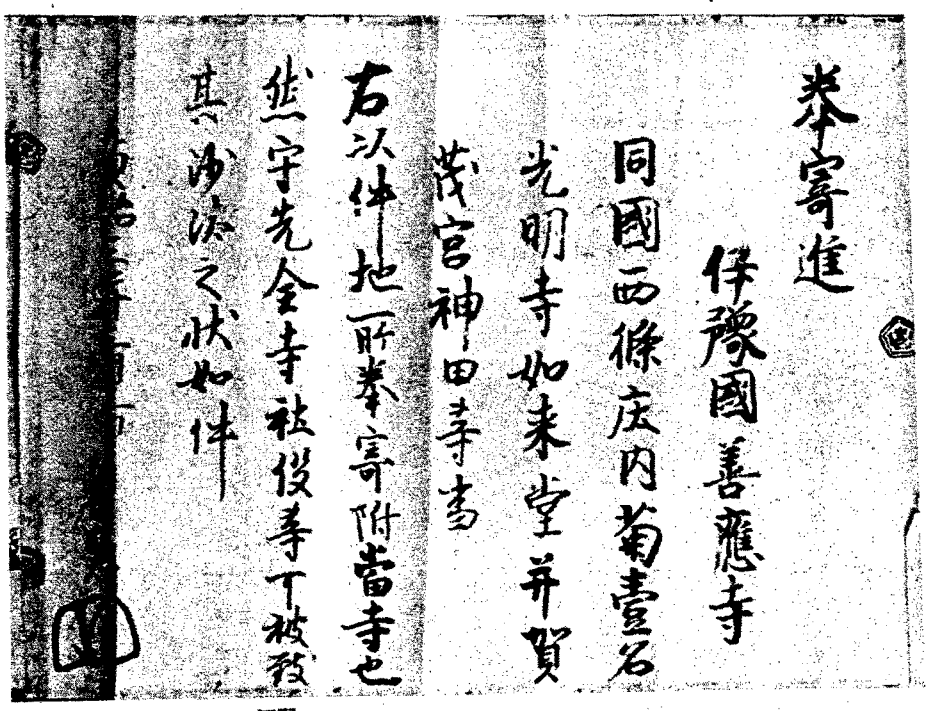
6月バス例会

伊予河野氏の盛衰と大山祇神社を訪ねる



善慧 河野通盛 寄進状〔善應寺文書〕　868号

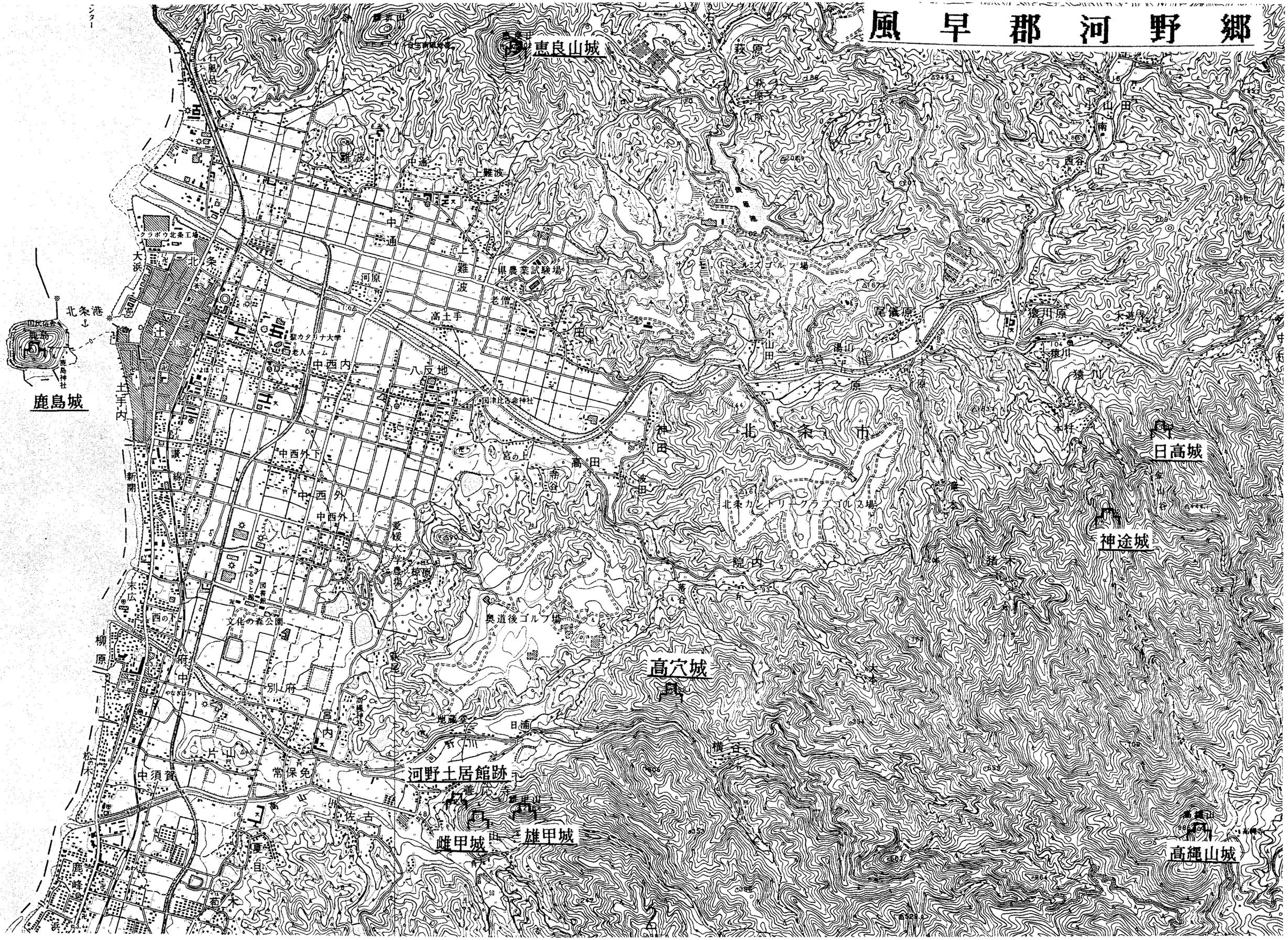
備陽史探訪の会
講師　田口義之会長、木下和司

探訪スケジュール

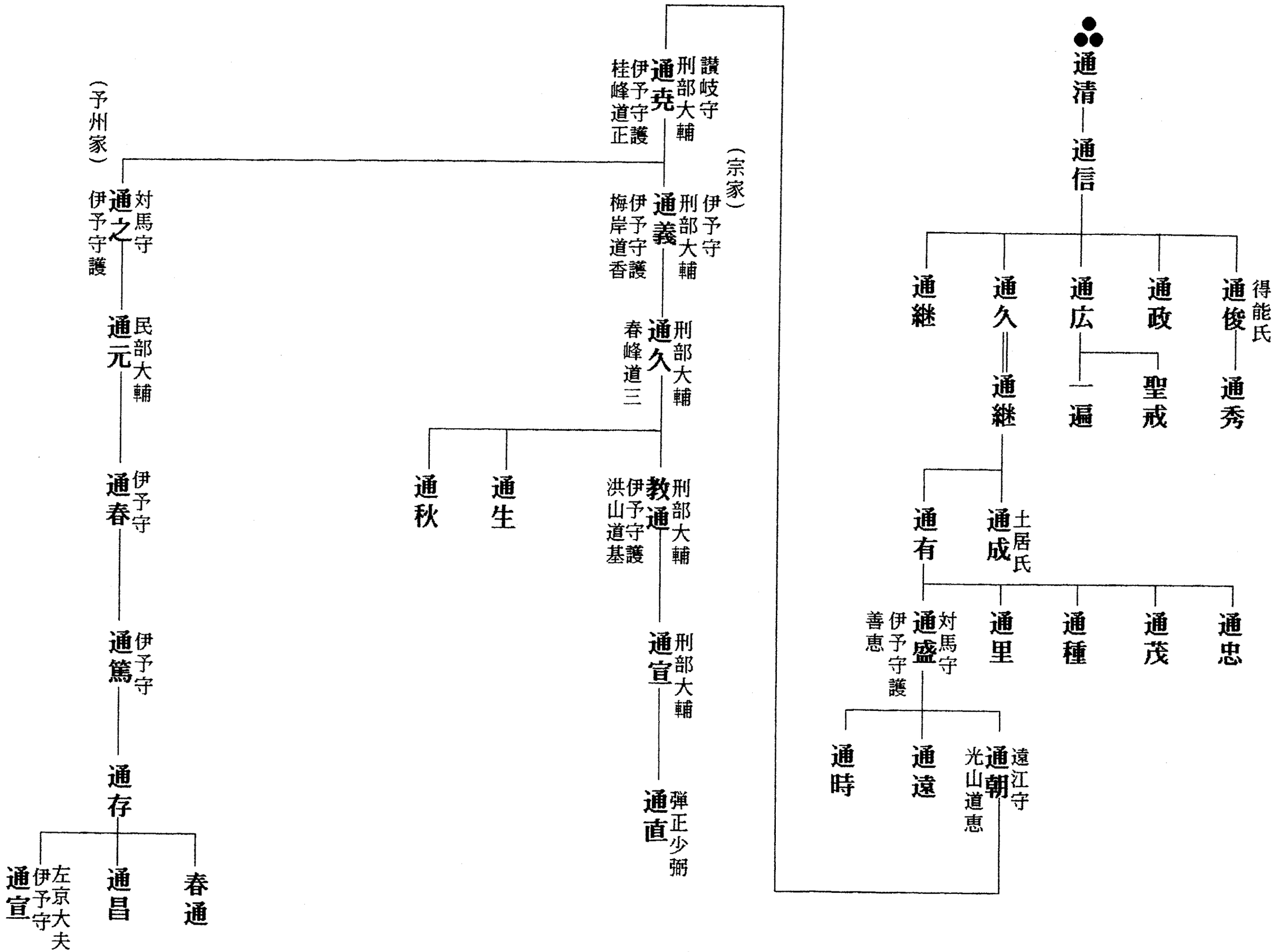
1．福山駅北口発		８：３０
2．瀬戸田パーキング着	（トイレ休憩）	９：１５
瀬戸田パーキング発		９：２５
3．善応寺（河野土居館跡）着	（トイレ有）	１０：３０
4．善応寺（河野土居館跡）発		１１：００
5．恵良山城　登山口着		１１：３０
6．恵良山城　山頂着	（昼食）	１２：３０
7．恵良山城　山頂発		１３：１５
8．恵良山城　登山口着		１３：４５
9．来島パーキング着	（トイレ休憩）	１４：３５
来島パーキング発		１４：４５
10．大山祇（おおやまずみ）神社着	（トイレ有）	１５：１５
11．大山祇（おおやまずみ）神社発		１６：１５
12．福山駅北口着		１７：３０

※５月度の行事案内と見学地が一部変更になっています。下見時に、恵良山城登山に時間を要することが判明したため、庄薬師堂・こうもり塚を割愛しています。申し訳ありませんが、ご了承をお願いします。

風早郡河野郷


恵良山城
鹿島城
日高城
神途城
高穴城
河野土居館跡
雄甲城
雌甲城
高縄山城
北条港
北条市
高田
神田
中通
上難波
下難波
河原
高土手
老僧
八反地
中西内
中西外下
中西外
中西外上
宮内
別府
中須賀
常免
佐古
夏目
末広
柳原
大浜
土手内
萩原
尾儀原
猿川原
猿川
湯山
小山田
小山南
西谷
本村
寺之原
北条カントリークラブゴルフ場
奥道後ゴルフ場
文化の森公園
愛媛大学農場
県農業試験場
聖カタリナ大学
老人ホーム
国津比古命神社
鹿島神社
クラボウ北条工場
図書館
地蔵堂
日浦
横谷
大本
猪本
院内
落合
帝谷
宮の上
波田
鹿峰
片山
鹿島

河野氏略系図（「予陽河野家譜により」景浦勉氏作成）



六月バス例会資料

伊予河野氏について

文責：木下和司

六月のバス例会は、しまなみ街道を走破して伊予国の名族河野氏の本拠地・風早郡河野郷を訪ねます。河野氏は伊予国の歴史に馴染みのない方にはあまり聞きなれない一族だと思います。私個人としては備後で言えば宮氏に似た一族ではなかったのかと思っています。但し、宮氏の足跡が南北朝期以降にしか確認できないのに対して、河野氏には平安末期から歴史上にその足跡を残しています。

【河野氏の出自】

河野氏は、その出自を古代以来、伊予に勢力を維持した豪族越智氏だとしています。「除目大成抄」という書物に収められている太政官符によると、永久五年（1117）十二月伊予国大掾として正六位上越智宿禰貞吉がみえ、この人物は越智一族に属していたと思われます。また、貞吉の系譜につながると思われる人物たちが十～十一世紀にかけて伊予国の掾や目として散見される。つまり、越智氏は雑任国司として伊予の国衙を勢力の基盤とした一族と考えられます。雑任国司とは中央から派遣されてくる守や介の受領国司と対をなす言葉で、いわゆる国衙在庁官人のことを意味しています。平安時代後期になると、越智氏は国衙在庁としてその中枢を握るとともに、大山祇神社の大祝職を手中に収め地方祭祀機構をその影響下に置きます。つまり、越智氏は伊予国において地方政治の実権と宗教的権威の両方を手中にしたことになります。そして、越智氏一族からは伊予の中世に活躍した新居氏・別宮氏・河野氏の三つの一族が分出したと言われています。しかし、最近の河野氏の研究者たちは河野氏は越智氏とは繋がりのない在地領主だと考えています。そして、平安末期に風早郡河野郷に成立した新興の開発領主というのが、河野氏の出自に対する最新の見解のようです。

【鎌倉時代の河野氏】

河野氏の史料上の初見は、『吉記』養和元年（1181）八月廿三日の条に「伊予国在庁川名大夫通清」と見えるものです。この人物は河野氏の祖とされる河野通清をさしています。また、『吾妻鏡』養和元年（1181）九月廿七日の条に「河野四郎以下在庁等」とあり、この人物が幕府御家人となって活躍する河野通信にあたります。平安末期には、河野一族は伊予国衙在庁として歴史上にその姿を明確に現わします。この時点で伊予国衙には越智氏の流れを引く新居氏・別宮氏と新興勢力である河野氏

が鼎立していたようです。

平安末期、全盛を誇った平氏の討伐に諸国の源氏が立ち上がります。東国の武士たちはこれら源氏を推戴して立ち上がりますが、西国は平氏勢力圏であったために殆どの武士が平氏に味方します。こんな情勢の中で、寿永・治承の内乱当初から河野氏が頼朝に味方して立ち上がったことは異様に写ります。なぜ、河野氏が頼朝に味方したのか。その理由が河野氏の国衙に於ける立場を象徴しています。それは、古くからの国衙在庁であった新居氏や別宮氏が平氏方であったために、新興勢力であった河野氏は伊予国でその勢力を更に延ばすためには、源氏に味方せざるおえなかった分けです。

寿永・治承の内乱の最終勝利を頼朝が握ることにより、河野氏も内乱における伊予国での勝利者となります。これにより河野氏も鎌倉時代初期の伊予国の実権を握ることになります。つまり、西国武士は西国の守護を通じて御家人に任じられたものが殆どであるのに対して、河野氏は東国武士と同様に将軍の見参に入り、直に御家人に任じられているのです。この事が中世初期の伊予における河野氏の立場をどれほど強固にしたかは、想像に難くありません。また、建仁三年（1203）四月六日の条によれば、しばらま鎌倉に常駐していた河野通信の帰国に際して将軍家御教書が下されたといいます。その御教書には伊予守護佐々木盛綱の命に従わず、河野氏がその勢力下にある御家人を率いて御家人役を勤仕することが公認されていました。つまり、室町時代の分郡守護的な立場に河野氏は立っていたことになります。しかし、この事が後に河野氏に別の不幸をもたらします。正に、幸不幸はあざなえる縄の如し。詳細は、後述します。その前に、寿永・治承の乱での河野氏と備後の因縁について書きたいと思います。

治承四年八月、伊豆の蛭ヶ小島での頼朝の旗揚げに合わせて、伊予国では河野通清がそれに呼応して風早郡河野郷の高縄山城で平氏に反旗を翻します。そして、河野氏は緒戦において国府を攻め落し、平維盛の目代を追い払います。さらに通清は周桑郡の平家方の諸城を攻め落しますが、通清の子・通信が九州へ出兵していた隙に備後の奴可入道西寂、阿波の田口成良が伊予に攻め入り、通清を高縄山城に攻め落してしまいます。ここに私たに馴染みの深い奴可入道西寂が登場してきます。そして、河野郷には西寂にまつわる遺跡が存在しています。それは、こうもり塚と呼ばれています。こうもり塚は奴可入道を生け捕りにした河野通信が、その遺骸を生めた場所と言われています。

さて、治承・寿永の乱に勝利したことが、その後の河野氏にどのような不幸をもたらしたのでしょうか。内乱後の河野氏はライバルであった新居氏、別宮氏を蹴落として三十二名の御家人を従え、所領五十三ヶ所、

公田六十余町を支配する中予一の大勢力に成長しています。これで河野氏の伊予支配が容易になったかというと左にあらずです。新たなライバルが登場するのです。それは伊予守護職を帯び、南伊予の喜多郡地頭職を得て入部してきた宇都宮氏です。つまり、伊予一国の支配を目指す河野氏の前に守護宇都宮氏が立ちはだかったのです。そして、承久の変に際して当然宇都宮氏は幕府側であったから、河野氏は後鳥羽上皇側にたった訳です。しかし、承久の変が幕府側の勝利に帰したために河野通信は奥州に配流されるに至り、中予支配も脆くも崩れ去ってしまいます。但し、当時の武家らしく通信は幕府側にも保険を掛けてありました。それは通信の五男通久は父に背いて承久の変に幕府方として参戦していたのです。通久は乱後に久米郡石井郷の支配権を幕府から保証されて、何とか河野氏はその命脈を繋ぐことができたのです。

通久の跡を弟通継が継ぎ、その甥通有が元寇に際して勇戦したことは有名です。通有は弘安の役に従軍し、「ことさらに石塁を背にしてその前に陣をはり、勝敗を決しようとの態度を示したので、さすがの九州の武士たちも通有の豪胆さに驚いて、これを『河野の後築地』と称した」という伝承があります。通有はこの軍功によって河野氏の旧領の回復することができたばかりでなく、肥前国神崎庄にも所領を得ることができました。このために、通有は河野氏中興の祖と言われています。

後醍醐天皇によって建武政府が樹立されますが、建武政府は武士の不満を解消する政権ではなかったために、政局は不安定でした。建武二年（1335）には早くも足利尊氏反旗を翻し、通盛は守護家河野氏の再興を目指して尊氏配下の武将となります。松山平野には宮方の勢力が強かったために、河野氏はその本拠を風早郡高縄山城から道後に移し、伊社爾波岡に湯築城を築きます。そして、通盛は貞和六年（1350）に室町幕府から伊予守護職に任じられ、河野氏の伊予支配も安定期に向かいます。しかし、それを阻んだ人物が讃岐守護細川頼之です。頼之の攻撃により通盛の子通朝は戦死し、その子通堯は九州に非難し、南朝方の西征府に降伏しその援助を受けるに至ります。正平二十三年（1368）、通堯は捲土重来を期して伊予に帰還し、中予・東予地域の細川勢を駆逐します。通堯は室町幕府内の反細川派勢力の台頭を見て、これと提携して宮方との親善関係を解消し幕府方に復帰しますが、細川氏の進撃を受けて敗死します。通堯亡き後、河野氏惣領家を継承したのは通堯の子竜王丸（通義）でしたが、幕府は河野氏の窮状を座視できず、細川氏との和睦を斡旋します。これによって河野氏の伊予支配は小康状態を得ます。但し、通義はわずか二十五才で没し、その弟通之が河野家を統率します。通之は兄通義の子通久が成長すると惣領職を譲り、以後、通久の系統が惣領家を継承して宗家と呼ばれます。これに対して通之の子孫は予州家と称

して、宗家と激しく対立します。この対立が生み出した内部抗争が河野氏を衰亡させる一因となります。

宗家・予州家の対立は嘉吉の乱（1441年）後、宗家教通と予州家通春の対立に始まり、応仁・文明の乱（1467～78年）に至ってもやまず、ますます領内を疲弊させます。教通の後、その子通宣（刑部大輔）が宗家を統率したが、予州家通篤との紛争は持続しました。さらに時代が経過するとともに、恩顧の家臣の平岡・正岡・重見氏らの反抗が相次いで起り、河野氏の指導力をさせました。通宣の子通直の代に、後継者を巡って女婿村上通康と家臣団とが正面衝突した。家臣団は自己の主張を貫徹したが、強力な水軍を持つ村上氏を離反させる要因をつくりました。

通直のあと通政、次いで通宣（左京大夫）が立ちましたが、家臣大野利直・和田通興らが反乱を起して領内は動揺しました。外では毛利氏と親善関係を維持することでようやく豊後大友氏の中予侵入を阻止することが可能となりました。通宣の後を継いだ通直の代には、家臣団の中に土佐の一条氏や長宗我部氏と結ぶもの、織田信長の勢力と提携するものが現れました。河野氏は内憂外患の中に長宗我部氏の侵攻を受けたので、中予地域は毛利・長宗我部氏両氏の争奪戦の舞台となりました。

天正十三年（1585）に、豊臣秀吉の命によって四国統一事業が推進され、小早川隆景が河野氏の討伐に当りました。通直は家臣団らを湯築城に結集して抵抗を試みましたが、その甲斐もなくやがて開城し降伏しました。その結果、河野氏の所領は没収され、隆景が伊予三十五万石の大名として本拠を湯築城に置いたので、伊予国は完全に秀吉の統一政権下におかれました。

【恵良山城】

①北条市上難波

②築城時期；治承元年（1177）頃

③築城者；河野通清

④種別；山城

⑤残存遺構；郭、井戸

⑥築城領域；５０ｍ×２５０ｍ

⑦比高；３０２ｍ

⑧記録；『予章記』、『忽那家文書』

恵良山は、北条市の北部、浅海の南方ににあって、海岸に近い天然の要害である。『河野家譜』の記するところによれば、治承五年（1181）七月、伊予の大族河野通清が源氏に呼応して高縄山城に挙兵するに及んで、備後国奴可入道西寂が大軍でもって押し寄せたので、通清は一族を励まして、日高・高穴・恵良などの砦を守らせて防戦するも衆寡敵せず落城するが、恵良山城に関する記録の初見である。

下って建武二年（1335）、北条氏の一族という赤橋重時なる者が、伊予の不平分子を集めて立烏帽子山（恵良山）城で挙兵したが、伊予宮方の軍勢の攻撃を受けて滅亡した。なお、この立烏帽子山については、恵良山説がある一方、周桑郡丹原町面木山の立烏帽子であるとの説もある。その後は、伊予宮方の重鎮土居通世がこの剣阻な要害によって活躍し、暦応四年（1341）には、武家方の河野通盛と戦ったことが、『忽那一族軍忠状次第』、『土居氏系図』などに記されていて、これが恵良山城に関する確かな文献としては最も古いものである。また、この城の二の丸の周辺には延長約１００ｍに及ぶ幅８ｍの帯状郭が明確に残っており、城井戸の遺構も、山の中腹に三ヶ所みられるが、このような縄張りが一応完成したのは、この時代のことであろうと思われる。

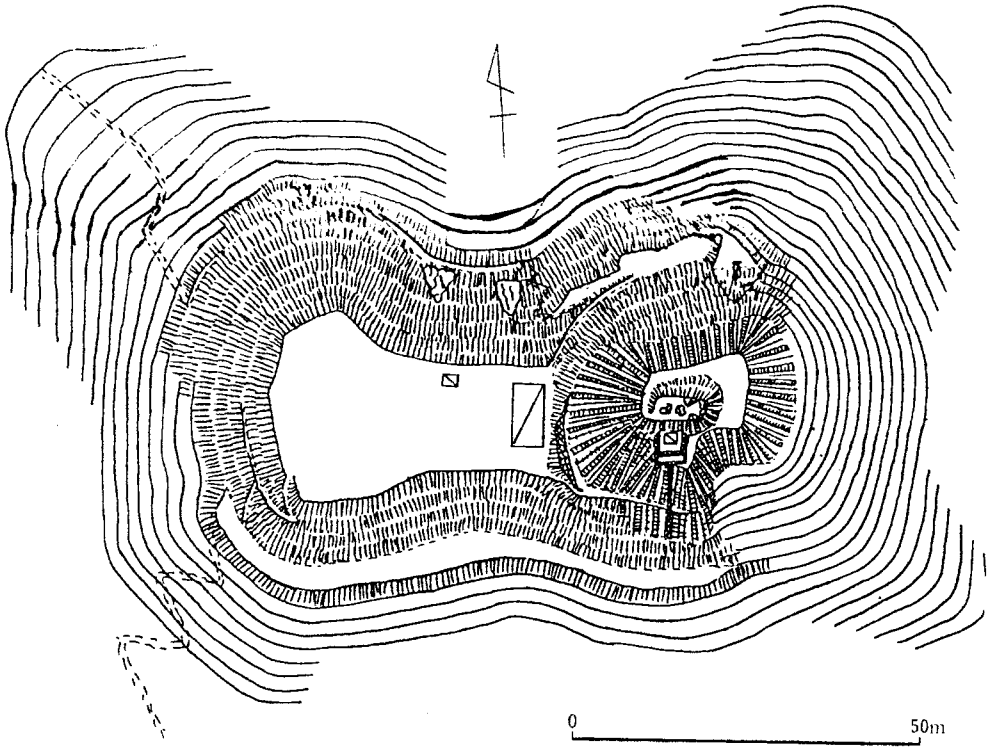
ついで、貞治三年（1346）、河野通堯が細川頼之の大軍に包囲された時には、同城にほど近い日高山城主重見通勝の依頼で、宮方の水師村上義弘と今岡通任が夜陰に乗じて浅海浦に押し渡り、通堯主従を救出して、無事、西征府へ送り届けたという。

以上のように、風早郡の要衝、恵良山城の主は転々と変わったが、室町時代は得能氏の支族得居氏の拠る所となった。しかし、天文の頃から、この近辺の地は来島村上氏の支配する所となったので、得居氏は、村上通康の長子通久を養子に迎え、それ以後は来島一族として、恵良山城に

君臨した。

同城は元亀三年（1572）、毛利氏の攻撃を受けて落城したこともあったが、天正十年（1582）、能島・因島両水軍の激しい攻撃に耐え抜き、豊臣秀吉による四国平定後、その功を認められて、恵良山城主として三千石を与えられた。

その後、慶長五年（1600）、関ヶ原の合戦に際して、来島一族は西軍に与したため、来島氏は豊後森へ移封され、それに伴って、恵良山城・鹿島城ともに廃城となった。



【大山祇神社】

※歴史

越智氏の一族が氏神としてこの地に移祭ちたもので、養老三年(719)、越智玉純が社殿を造営したと伝える。延喜式では名神大社に列し、のちに伊予国一宮に定められた。朝廷や武家の崇敬厚く、日本総鎮守大山積大明神と称されるほど栄えた。特に河野氏は、保護に勤めたが、河野氏が南北朝の争いに巻き込まれるや三度戦火を浴び、宝物も大半を失った。その後室町時代になって再建され、現在の姿となった。

※宝物館

紫陽殿と国宝館の二棟に分かれる。紫陽殿には、平安から室町時代にかけての鎧・兜など約百点が陳列され、国宝・重要文化財に指定された武具の多くがある。なかでも河野通信、源頼朝、義経奉納の鎧・兜は逸品である。国宝館は刀剣類が主体。後村上天皇奉納の大太刀、護良親王奉納の鎖太刀、日本最大の大太刀など約三百点を展示。

編集発行

備陽史探訪の会

〒七二〇-〇八四九　福山市多治米町五丁目一九番八号

TEL（〇八四九）五三―六一五七